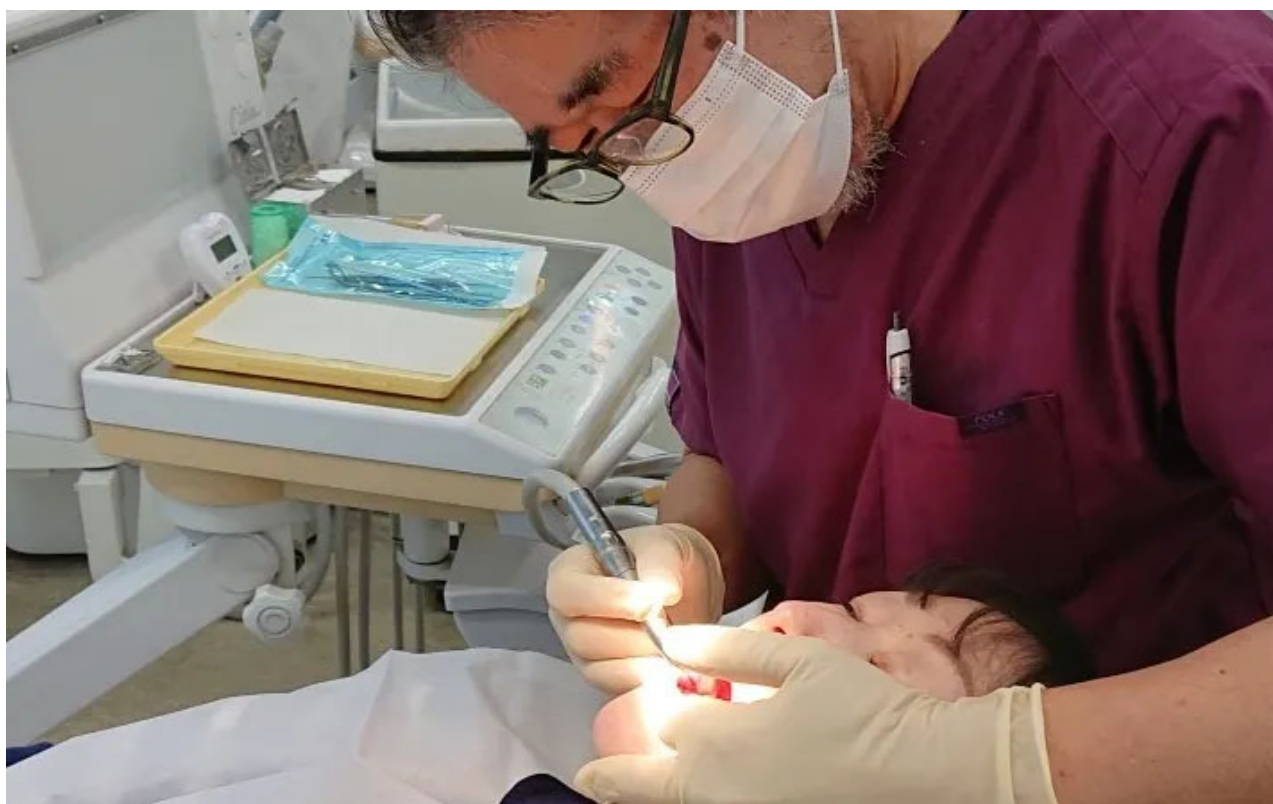


歯科医悩ます「銀歯」高 診療報酬の改定追いつかず

2021/5/6 5:00 | 日本経済新聞 電子版



パラジウム高が歯科医の経営を圧迫している（神奈川県横須賀市の平川歯科医院）

国際商品市況の高騰が歯科医という意外な場所に影響を及ぼしている。歯の治療に不可欠な「銀歯」の価格が、原材料貴金属の価格高騰により上昇が続いているためだ。投機マネーの影響もあって相場が急騰する一方、政府の決める治療費は一定期間据え置かれる。銀歯の仕入れ価格が治療費を大きく上回り、歯科医にとって悩ましい状況が続いている。

「治療をしても利益ゼロや赤字になる。とてもやっていられない状況だ」。神奈川県横須賀市で歯科医院を営む医師の田中敏章さんは嘆く。

銀歯の正式名称は「铸造用金銀パラジウム合金」。銀のほか、銀より高価な金とパラジウムを含む。特に含有率が2割と多いパラジウムの高騰が銀歯高に響いている。

パラジウムは主に自動車の排ガス触媒に使う貴金属だ。「近年中国などで環境規制が強まり、規制クリアの要となる触媒の需要が増している」（日本貴金属マーケット協会の池水雄一氏）。

パラジウムの国際相場は4月に史上最高値を更新。足元では1トロイオンス約3000ドル近辺と、過去5年で約5倍に上昇した。新型コロナウイルス禍からの経済回復に伴い自動車需要が

増加。そこに金融緩和であふれるマネー流入も加わり、高騰に拍車がかかっている。

パラジウムは過去5年で5倍に



パラジウム高を映し、歯科医が仕入れる銀歯の価格も高騰している。全国保険医団体連合会の調査によると、昨年2月頃には一時政府の決める公定価格では仕入れの実勢価格の6割程度しかカバーできなくなった。残りの逆ざや分は歯科医がかぶる。

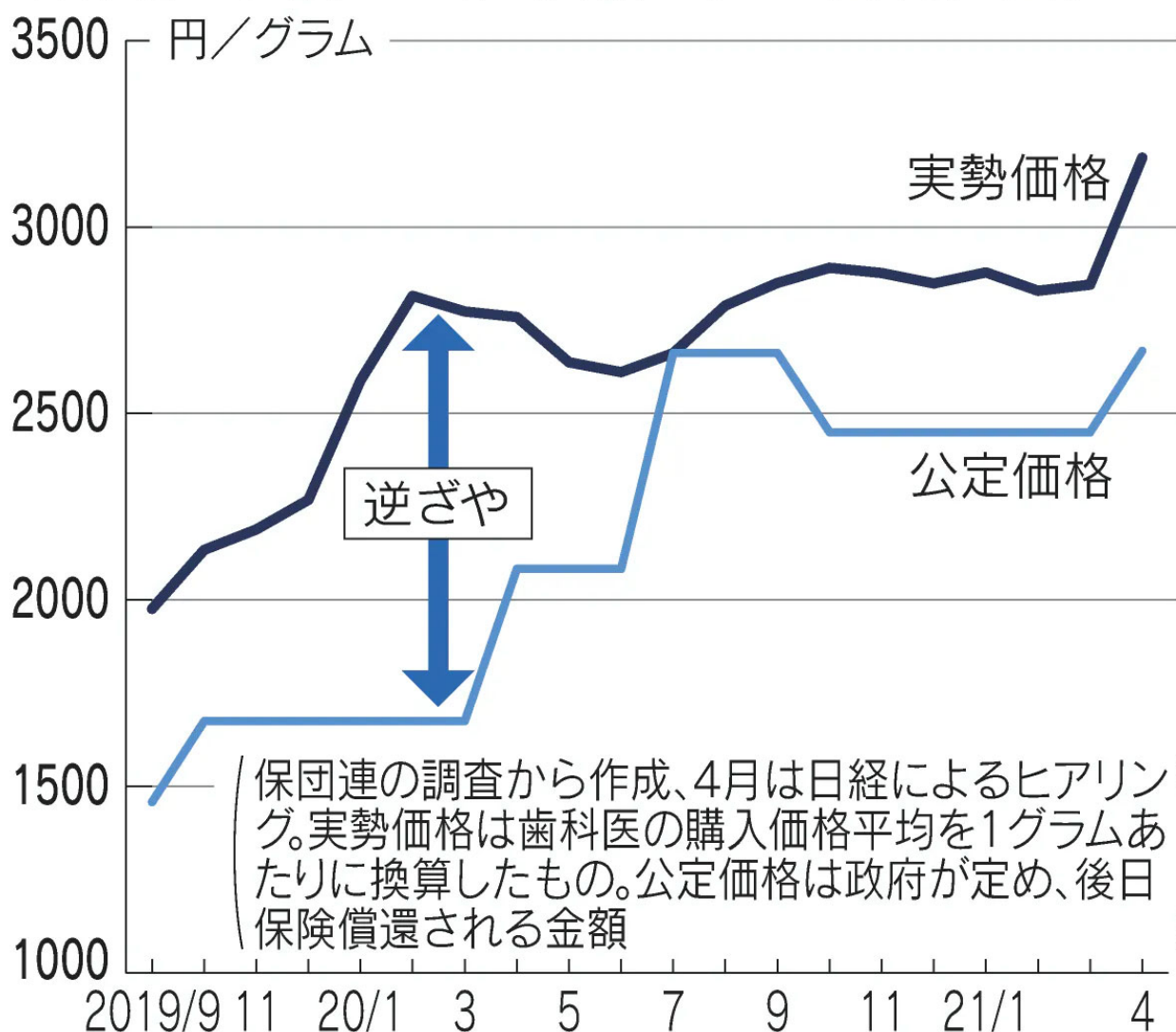
実勢価格と公定価格のずれが拡大したのは、貴金属の値動きを公定価格に迅速に反映できないためだ。銀歯の公定価格は基本的に2年に1度の診療報酬改定に合わせて決まる仕組み。半年以内に原料価格に5%以上の変動があった場合に見直すルールはあったものの、ここ数年の

急騰に追いつけなかった。これに対応して厚生労働省は昨年3月、原料価格の変動幅が15%と大幅に動いた場合に、より短期で公定価格を見直す制度を新たに導入した。

それでも根本解決にはなっていない。公定価格は4月現在1グラム2668円。一方で、4月上旬時点の仕入れの実勢価格は3200円前後と、2割弱の赤字が発生している。だが、4月中旬に開かれた中央社会保険医療協議会では今年10月までの公定価格の据え置きが決まった。価格の算定期間における貴金属の変動幅が、見直しの基準となる15%に達していないとみなされたためだ。今後相場がさらに高騰して逆ざやが広がっても、現行制度に变化がない限り公定価格は今後半年間変わらない。

逆ざやは歯科医の賃金となる技術料を圧迫している。歯科医が利益の出ない銀歯を避け、利幅の大きい高額な治療ばかり勧めれば患者の負担も増すことになる。厚労省はプラスチックを用いた代替材の保険適用を進める。ただ現時点では「治療面で銀歯などの金属の方が優れている」（歯科医）との見方も多い。

「銀歯」の実勢と公定価格の差は歯科医負担に



一部の歯科医からは、逆ざや分を患者から徴収したいとの声も上がる。現在は認められていないが、かつて自費診療材料費を保険給付で振り替え、上回った差額を患者から徴収できる仕組みがあり、1970年代には高額な医療費を請求する一部の歯科医の存在が社会問題化した。政府は76年にこの仕組みを廃止した経緯がある。

制度の矛盾で生じた逆ざやのツケを患者に回そうとすれば問題を再燃させかねない。神奈川県保険医協会の高橋太事務局次長は「経済力にかかわらず治療を受けられるという皆保険制度の理念に反する」と指摘する。

短期で動く貴金属相場の実態に即し、歯科医と患者の負担のバランスがとれた公定価格を決められる制度を求める声が強まっている。

（コモディティーエディター 浜美佐）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.